朝の猫、空を想う

器用貧乏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朝の猫、空を想う

【コード】

N4032Q

【作者名】

器用貧乏

【あらすじ】

試験勉強に日々忙しい私。それを見ていた猫は何を想う。

「眠れない」

ベッドの中で寝返りをうちながらつい独り言を呟いてしまう、明日は大事な入試試験だというのに。もう一度寝返り再び元通りになる。月明かりのこぼれる窓には見慣れたシルエツト。

「マール、また空見てるの？」

マールと呼ばれた猫はその声に耳をピクツと反応させたが、視線は依然星空きらめく世界に向けていた。マールは仔猫の時に弟が拾ってきた雌猫なのだが世話の方はほとんど私がしていたのですっかり懐いてしまい、今では完全に私の部屋で同居中という間柄。三毛猫で色々な柄で体が彩られているのでマール。本人もその名前を気に入ってくれているのか、呼ぶと耳をピクピクさせさらに気分が良いと寄って来てくれたりする。空が好きな私がまだ小さかったマールを抱いて頻繁に眺めていた広大な世界。それが習慣になっってしまったようで窓際はマールの特等席になっている。最近是我的試験勉強が忙しくて二人で見ることは無くなり、一匹ポツンと物思いに耽っている姿が定番となっていた。

私は掛け布団を押し退けガウンを羽織って椅子を窓際に寄せ、マールが見ている景色を眺めた。どうせ布団に入ったって眠れないのだし今さらジタバタしても仕方が無い、それなら少しの間でも好きな風景を見て心を落ち着かせた方がよほど有益に違いない、それに傍には大好きなマールも居てくれる。

しばらく二人は彫像のように微動だにせず流れる風景を眺めていた。何も話さず、何も語りかけず。言葉なんかいらぬ、そんな景色が二人の眼に映し出されている。

「もう寝るね。」

私はマールの邪魔にならないよう小声でささやいた。マールも例の如く耳をヒクつかせたが、自身も満足したのか私が布団に入

つて窓を見たときには体を丸めて寝息を立てていた。

朝になる。予定より1時間も早い起床、ほとんど眠れていなかった。不安とプレッシャーで朝食に出されたコーンポタージュでさえ無理やり胃袋に収める始末、心臓の鼓動が時間を経ることに速く大きくなっていく感覚を覚えた。

部屋に戻り身支度を整える。受験票は入れた、鉛筆も消しゴムもオーケー、電車賃と昼食代は、まあこれくらいあれば足りるだろう。時計を見る。早く起きた分まだ時間的な余裕はあった。が、このまま部屋にいても不安が増すばかりで何もできやしないだろう。それなら早く家を出た方がむしろ腹をくくれて良いかもしれないし、最近では公共機関の遅れなどのニューノーマスも時々目にするところがある。そういった不測の事態にも備えることも出来る。私はもう一度身の回りを確認した後、部屋を出ようとドアノブに手を掛けた。

「ミャーオ」

ハツと振り返る。マーブルの声なのだろうが、マーブルは大人しい性格の猫で滅多に鳴き声を聞くことは無かったのでびっくりした。マーブルはいつものように空を見上げている。

「マーブル、今日は大事な日なんだ。マーブルも応援しててね。」
ドアノブから手を離し窓に近づきながら話しかける。

「ミャーオ」

再び鳴いた、空を見つめながら。

「何かあるの？」

不審に思った私が窓から見上げてみても、そこには無限に広がる青色しか無かった。

首を傾げながらマーブルの方へ目をやると、マーブルが急に両前脚をバタバタさせ始めた、まるで鳥の雛が大空へ羽ばたく練習をしているかのように。もちろん二足で立つことはできないので一瞬バ

タつかせながら両足を地面についで、を繰り返している。始めはマーブルの体が変調をきたしてしまったのかと心配したが、本人の表情は至って真剣でその仕草と顔が可笑しくてついつい吹きだして笑ってしまった。

しばらくすると疲れたのかいつもの特等席で丸くなった。尻尾だけが左右に振れる、私には「いつてらっしゃい」と聞こえた。

玄関のドアを開けると眩しいくらいの日差しが降り注いでいる。お母さんの「頑張つてね」の声に手を振りながら歩き始めた。

駅に向かう途中でマーブルの事を考えていた、朝の出来事を。

本当に飛ぶ練習をしているかのような仕草、翼なんて有りはしないのに。けれどあの表情には笑えた、あの真剣な顔。「フフツ」と思い出し笑いをして頬が緩んだ。

空を見上げた。冬の寒さに研ぎ澄まされた曇りの無い青が私の心の中に染み渡ってくる。あれだけ大きく聞こえた心臓の鼓動は知らぬ間に収まっていた。

<了>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4032q/>

朝の猫、空を想う

2011年1月28日01時53分発行